

二〇二四年度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国

語

(六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 開始のチャイムが鳴ったら、問題冊子の全てのページがそろっていることを確認して、解答を始めなさい。
 - 二 問題冊子は1ページから25ページまであります。
 - 三 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に記入しなさい。
 - 四 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 終了のチャイムが鳴ったら、解答をやめなさい。

解答用紙は、問題冊子の上に開いたまま裏返して置きなさい。

〈解答は、句読点や記号も一文字分と数えて記入すること〉

受験番号

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

見えない人が「見て」いる空間と、見える人が目でとらえている空間。それらがどのように違うのかは、一緒に時間を過ごす中で、ふとした瞬間に①明らかになるものです。

全盲の木下路徳みちのりさんと一緒に歩いているとき、その日、私と木下さんは私の勤務先である東京工業大学大岡山キャンパスの私の研究室でインタビューを行うことになっていました。私と木下さんはまず大岡山駅の改札で待ち合わせて、交差点をわたってすぐの大学正門を抜け、私の研究室がある西9号館に向かって歩きはじめました。その途中、十五メートルほどの穏やかな坂道を下っていたときです。木下さんが言いました。「大岡山はやっぱり山で、いまその斜面を下りているんですね」

私はそれを聞いて、かなりびっくりしてしまいました。なぜなら木下さんが、②そこを「山の斜面」だと言ったからです。毎日のようにそこを歩き来していましたが、私にとってはそれはただの「坂道」でしかありませんでした。つまり私にとってそれは、大岡山駅という「出発点」と西9号館という「目的地」をつなぐ道順の一部でしかなく、曲がってしまったらもう忘れてしまうような「部分」でしかなかった。それに対して木下さんが口にしたのは、もっと※俯瞰ふかん的に空間全体をとらえるイメージでした。

確かに言われてみれば、木下さんの言うとおり、大岡山の南半分は駅の改札を「頂上」とするお椀わんをふせたような地形をしており、西9号館はその「ふもと」に位置しています。その頂上からふもとに向かう斜面を私たちは下っていました。

けれども③見える人にとって、そのような俯瞰的で二次元的なイメージを持つことはきわめて難しいことです。坂道の両側には、サークル勧誘の立て看板が立ち並んでいます。学校だから、知った顔とすれ違うかもしれません。前方には混雑した学食の入り口が見えます。目に飛び込んでくる様々な情報に、見える人は意識を奪われるのです。そこを通行するときに自分がどんな地形のどの辺りを歩いているかなんて想像する余裕はありません。

そう、私たちはまさに「通行人」なのだと思いました。④「通るべき場所」として定められ、方向性を持つ「道」に、

いわばベルトコンベアのように運ばれている存在。一方、まるでスキーヤーのように広い平面の上に自分で線を引く木下さん。

物理的には同じ場所に立っていたのだとしても、その場所に与える意味^a シグナル^aでは全く異なる経験をしていることになる。それが、木下さんの一言が私に与えた驚きでした。人は、物理的な空間を歩きながら、実は脳内に作り上げたイメージの中を歩いている。私と木下さんは、同じ坂を並んで下りながら、実は全く違う世界を歩いていたわけです。

視覚障害者は「道」から自由だと言えるのかもしれませんが。道は、人が進むべき方向を示します。もちろん彼らだって、個人差はあるとしても、音の反響や白杖^{はくじょう}の感触を利用して、道の幅^bや向きを^c ハイク^cしています。しかし、目が道のずっと先まで一瞬にして見通すことができるのに対し、音や感触でハイクできる^d ハイク^dは限定されている。道から自由であるとは、予測が立ちにくいという意味では特殊な^e シンチョウ^eウさを要しますが、だからこそ、道だけを特別視しない俯瞰的なビジョンを持つことができたのでしょうか。

全盲の木下さんがそのとき手にしていた「情報」は、私に比べればきわめて少ないものでした。少ないどころか、たぶん二つの情報しかなかったはずです。つまり、「大岡山という地名」と「X」の二つです。しかし情報が少ないからこそ、それを解釈することによって、見える人では持ち得ないような空間が、頭の中に作り出されました。

木下さんはそのことについてこう語っています。「たぶん脳の中にはスペースがありますよね。見える人だとそこがスーパーや通る人だとかで埋まっているんだけど、ぼくらの場合はそこが空いていて、見える人のようにには使っていない。でもそのスペースを何とか使おうとして情報と情報を結びつけていくので、そういったイメージができてくるんでしょうね。さっきなら、足で感じる『斜面を下っている』という情報しかないの、これはどういうことだ？ と考えていくわけです。だから、見えない人はある意味で余裕があるのかもしれないね。見えると気が奪われちゃうんでしょうね。きっと、まわりの風景、空が青いだとか、スカイツリーが見えるとか、そういうので忙しいわけだよね」

⑤ まさに情報の少なさが特有の意味を生み出している実例です。都市では、目がとらえる情報の多くは人工的なものです。大型

スクリーンに映し出されるアイドルの顔、新商品を宣伝する看板、電車の中吊り広告……。見られるために設えられたもの。視覚的な注意をさらっていく情報の洪水。確かに見える人の頭の中には、木下さんの言う「脳の中のスペース」がほとんどありません。

それに比べて見えない人は、こうした洪水とは無縁です。もちろん音やにおいも都市には氾濫しています。A 木下さんに言わせれば、「脳の中に余裕がある」。さきほど、見えない人は道から自由なのではないか、と述べました。この「道」は、物理的な道、B コンクリートや土を埋めて作られた文字通りの道であると同時に、比喩的な道でもあります。「こつちにおいて」と人の進むべき方向を示すもの、という意味です。

人は自分の行動を一〇〇パーセント自発的に、自分の意志で行っているわけではありません。知らず知らずのうちに周りの環境に影響されながら行動していることが案外多いものです。

「寄りかかって休む」という行為ひとつとっても、たいていは寄りかかろうと思って壁を探すのではなくて、そこに壁があるから寄りかかってしまう。子どもの場合には特にその割合が高くなります。ボタンがあるから押したくなるし、台があるからよじ登ってしまう。環境に埋め込まれた様々なスイッチが※トリガーになって、子どもたちの行動が誘発されていきます。

いわば、⑥人は多かれ少なかれ環境に振り付けられながら行動している、と言えるのではないだろうか。あるトリガーから別のトリガーへとめまぐるしく注意を奪われながら、人は環境の中を動かされていきます。人の進むべき方向を示す「道」とは、「こつちに来なさい、こつちに来てこうしなさい」と、行為を導いていく環境の中に引かれた導線です。C、京都の桂離宮に行くと、その場所はどこを見るべきかというまなざしの行方までもが計算されていることに気づきます。人の行動をいざなう「道」

が随所に仕掛けられているわけです。実際に訪れてみて、桂離宮というのはまるで舞踏譜のようだなとききりに感じしました。

桂離宮ではひとつの道が明瞭に引かれています。都市においては無数の道がYに引かれています。しかもその多くは、人の欲望に強く訴えてくる。真夏のかんかん照りの道にコーラの看板があれば飲みたくなってしまおうし、「本日三割引」の

のぼりを見ればついスーパーに入って余計な買い物をしてしまう。その欲望がもともと私の中にあっただうかはどうかは問題ではありません。視覚的な刺激によって人の中に欲望が作られていき、気がつけば「そのような欲望を抱えた人」になっています。

資本主義システムが視覚的な刺激を原動力にして回っていることは言うまでもないでしょう。それを否定するつもりはありませんが、都市において、私たちがこの振り付け装置に踊らされがちなのは事実です。

このように見てみると、見える人と見えない人の「ダンス」の違いに気づきます。中途失明の難波なんば創太はらさんは、視力を失ったことで、「道」から、都市空間による「振り付け」から解放された経験について語っています。「見えない世界というのは情報量がすごく少ないんです。コンビニに入っても、見えたところは色々なおいしそうなものが目にとまったり、キャンペーンの情報が入ってきたりした。でも見えないと、欲しいものを最初に決めて、それが欲しいと店員さんに言って、買って帰るといふふうになるわけですね」

周知のとおり、コンビニの店内は、商品を配列する順番から高さまで、売り上げを最大化するための「振り付け」がもつとも周到に計算された空間のひとつです。うかうかしていると公共料金を払いに来たのにいつにプリンを買ってしまったりする。

ところが難波さんは、見えなくなったことで、そうした目に飛び込んでくるものに惑わされなくなった。つまりコンビニに踊らされなくなったわけです。あらかじめ買うものを決めて、その目的を遂行するような買い方になります。目的に直行するということがむしろ人間のようですが、むしろ逆でしょう。むしろ個人差はあるでしょうが、見える人の手足が目の前の刺激に反応してつい踊り出してしまうのに対して、見えない人はもつとゆったり、俯瞰的にものごとをとらえているのかもしれない。

見えないという条件で脳内に作られるコンビニ空間のイメージは、どうしたって見えていたときに目がとらえていたコンビニの空間とは違います。おそらくは、入り口と、よく買う商品と、レジの位置がマークされた星座のような空間でしょう。

「見えない世界の新人」のうちには、どうしてもこれを欠如としてとらえてしまっていた。しかし、しだいに脳が作り上げたその新しいコンビニ空間で十分に行動できることが分かってくる。そのことに納得して歩くことができたとき、^⑦ 踊らられないで進む

この安らかさを、難波さんは悟ったのではないでしょうか。

(伊藤 亜紗^{あさ} 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』より)

注 ※ 俯瞰：高い所から見下ろすこと。

※ トリガー：きっかけ。

問一 線 a k e のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。(楷書ではつきりと書くこと)

問二 線 ① 「明らかに」の品詞名を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 動詞 イ 形容詞 ウ 形容動詞 エ 連体詞 オ 副詞

問三 線 ② 「そこ」の指す内容を本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問四 ——— 線③ 「見える人にとって、そのような俯瞰的で三次元的なイメージを持つことはきわめて難しいことです」とありますが、なぜ「見える人」は「俯瞰的で三次元的なイメージを持つこと」が難しいのですか。その理由を本文中の言葉を使って六十文字以内で説明しなさい。

問五 ——— 線④ 『『通るべき場所』』として定められ、方向性を持つ『道』に、いわばベルトコンベアのように運ばれている存在。一方、まるでスキーヤーのように広い平面の上に自分で線を引く木下さん」とありますが、この二つの比喻から筆者が伝えている内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 目が見えている人は線状に動いているだけだが、木下さんは平面的に動いている。
- イ 目が見えている人は受動的に動いているだけだが、木下さんは能動的に動いている。
- ウ 目が見えている人は習慣的に動いているだけだが、木下さんは常に初めての経験をしている。
- エ 目が見えている人は主観的に判断して動いているだけだが、木下さんは客観的に判断して動いている。
- オ 目が見えている人は視覚にとらわれて動いているだけだが、木下さんは他の感覚も使って動いている。

問六 本文中の X に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 肌で感じる風

イ 足で感じる傾き

ウ 鼻で感じる木々の香り

エ 耳で聞こえる人々の会話

オ 手から伝わるあたたかさ

問七 ——— 線⑤ 「まさに情報の少なさが特有の意味を生み出している実例です」とありますが、「情報の少なさが特有の意味を

生み出している」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 目が見えない木下さんは、知り得る情報が少なく脳内に余裕があるため、限定された情報を自分で結びつけて解釈するので、俯瞰的なビジョンを獲得することができたということ。

イ 目が見えない木下さんは、情報が限られているゆえに想像力を豊かに働かせることができるので、進むべき方向を人の手を借りずに自分で知れたということ。

ウ 木下さんは、目が見えないからこそその他の感覚が研ぎ澄まされ、目の見える人が持ち得ないような絶対音感を手に入れることができたということ。

エ 木下さんは、目が見えないからこそ周囲を気にせず自分なりに情報を解釈できるので、固定観念にとらわれない現状認識をすることができたということ。

オ 目が見えない木下さんは、進むべき方向を示す「道」から自由なので、雑多な情報を気にせず自分の感覚だけを信じるこ
とができるため、独自の世界を築いたということ。

問八 本文中の A } C に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを二度選んではいけません。

- ア つまり イ しかし ウ しかも エ たとえば オ なぜなら

問九 ———線⑥ 「人は多かれ少なかれ環境に振り付けられながら行動している」とありますが、人々をこのように行動させているものは何ですか。本文中から六字で抜き出して答えなさい。

問十 本文中の Y に当てはまる四字熟語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 五里霧中 イ 奇想天外 ウ 縦横無尽 エ 前代未聞 オ 千載一遇

問十一 ————線⑦「踊らされないで進むことの安らかさ」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 資本主義システムの下、企業は視覚に訴える装置を用いて人々の購買意欲をかきたてることで利益を得ようとするが、目が見えない人はそのシステムから疎外されているということ。

イ 目が見えていたときは、コンビニに入ると楽しくなっただけで、見えなくなっただけは事務的にすばやく用事をこなすようになったということ。

ウ 失明してすぐのときは、できなくなったことばかりに意識が集中し、不満をつのらせていたが、徐々に目が見えない生活に慣れてきて穏やかに暮らせるようになったということ。

エ 目が見えていないと、お金を使わせようと用意された数々の装置にひっかかってしまうが、目が見えないと、それらにだまされることはないので、余裕をもって買いたい物ができるとのこと。

オ 目が見える人は、目に飛び込んでくるものに惑わされ、ついつい反応してしまうが、目が見えない人は惑わされることはないので、ゆったり自分のしたいことを実行できるとのこと。

【二】 次の文章は、小川洋子の『ひよこトラック』の一節である。町にひとつだけあるホテルのドアマンをしている初老で独身の「男」は、郊外にある下宿に引っ越ししてきた。そこには、大家である「未亡人」と「少女」がふたりで暮らしていた。「少女」は父親に捨てられ母親に死なれて、祖母にあたる「未亡人」に引き取られている。「少女」は誰に対しても一言もしやべらないが、やがて「男」に「セミの抜け殻」などをくれるようになる。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

セミの次に少女が持ってきたのは、ヤゴの抜け殻だった。次がカタツムリの殻、ミノムシの籠のみ、蟹かにの甲羅、と続いていった。圧巻はシマヘビの抜け殻で、直径二センチ、全長五十センチもあり、それ一つで窓辺のスペースの半分近くを独占した。日に日に窓辺の抜け殻コレクションは充実していった。

少女はそれらを眺め、満足そうな表情を見せた。二人は時折一緒に、窓辺の時間を過ごすようになった。少女はコレクションの前にぺたりと座り込み、男はその折々で、^a 手持ち無沙汰に立っていることもあれば、彼女のためにジュースを注いでやることもあった。

最初のうち男は、こんなにも年の離れた、しかもしゃべらない人間と、どう間をもたせたらいいのか戸惑ったが、すぐに要領をつかんだ。つまり、抜け殻を眺めていればいいのだ。それでふたりには何の不足もなかった。

どの抜け殻にも、眺めれば眺めるほど、新しい発見があった。男がまず驚いたのは、脱皮した殻が実に精巧な作りをしていることだった。セミの腹に刻まれた皺しわから、頭部の先端に密集する毛まで。ヤゴの透明な眼球から、羽に浮き出す網目模様まで。かつて殻の中で生きていた生物の形を、克明に留とどめていた。隅々まで神経が行き届いていた。どうせ脱ぎ捨てられるものだから、といういい加減なところが微塵みじんもなかった。

更には、それほど精巧でありながら、綻びがないのだった。背中に一カ所、ファスナーのような切れ目がある以外、どこも破れ

たり、くしゃくしゃになったりしていい。シマヘビになると、そっくりそのまま裏返しになっていて、模様が内側に広がっているという手のこみようだった。

人間でもこんなに上手に洋服を脱ぐことは不可能だ、と男は思った。間違いないこれは、プレゼントに値する驚異だ、とひとりで確信を深めたりもした。

しかし、男はこうした思いのあれこれを、少女に向かって言葉にはしなかった。返事がもらえないからではなく、お互いにしゃべらない方が平等だ、という気がしたからだ。たとえしゃべらなくても、少女のそばにいれば、彼女が抜け殻について自分と同じような発見をしていることが、伝わってきた。

彼女はそれらを人差し指でついたり、光にかざしたり、においをかいだりした。ちよつと考え込んだり、口元に微笑を浮かべたりした。少女が動くたび、肩先で三つ編みの結び目も揺れた。全部眺め終わった後は、順番と向きを間違えないよう、男が並べた通りに元に戻した。

男は① **抜け殻**と同じように、少女についても次々と発見をした。小ささは手にとどまらず、身体じゅうのあらゆる部分に及んでいた。鼻も耳も背中も、ただ小さいというだけで、神様が特別に **丹精を込めた**感じがした。髪の毛は甘い香りがした。瞳の黒色はあまりに深く、それが何かを見るためのものだということを、忘れそうなほどだった。自分も六つの時は、こんなふうだったのだろうかと思うだけで、訳もなく哀しくな**か**った。

「どこにいるんだい。さあ、ご飯の支度、できたよ」

台所で未亡人が、少女を呼んでいた。

ひよこトラックが二度目に農道を通った時、少女はちょうど男の部屋にいた。ガタガタとしたエンジン音の響きだけで二人はすぐ何近づいてきているのか分かった。男は窓を開けた。

同じように荷台は色とりどりのひよこで埋まっていた。例のさえずりも聞こえてきた。少女は顔を輝かせ、^② 精一杯爪先立ちをした。吊りスカートが持ち上がって、パンツが見えるのではないかと、男は気が気ではなかった。しかし少女はそんなことはお構いなく、少しでもひよこに近づこうとして窓枠から身を乗り出した。彼女が落ちないように、男はスカートの紐をひっぱった。

^③ ひよこよね。ああ、そうだ、ひよこだ。

二回目ともなれば、目配せの確認も簡潔に済んだ。少女は手すりを握り締め、瞬きをするのも惜しいといった様子だった。風景の中で、そのトラックの荷台だけが別格だった。光を浴びる羽毛は花園であり、湧き上がるさえずりは歓喜のコーラスだった。けれど男は知っていた。着色されたひよこたちは、長生きできないということを。縁日の人込みの中、ハロゲンライトに照らされながら、彼らは窮屈な箱に押し込められる。乱暴に首をつかまれ、足をひっぱられる。買われた先ではすぐに飽きられ、羽の色もいつしかあせ、糞にまみれて衰弱死する。あるいは猫に食べられる。売れ残ったひよこは、箱の片隅で窒息死している。

少女が何もしゃべらない子どもでよかったと、その時男は初めて思った。もし少女に、「ひよこたちはどこへ行くの？」と尋ねられたら、自分はきつと答えに詰まるだろう。本当のことを言うべきか嘘をつくべきか分からず、うろたえてしまうだろう。

しかし二人は言葉を発しないのだから、^④ 少女の黒い瞳の中では、ひよこはどこへでも行けるのだ。虹を渡った先にある楽園で、可愛い色の羽をバタバタさせながら、いつまでも幸福に暮らすのだ。

新しいコレクションとして少女が選んだのは卵だった。彼女が裁縫箱と卵を持って二階へ上がってきた時、どういふつもりなのか意図がつかめなかった。最初は卵をかえしてひよこにしたいのかと思った。少女は裁縫箱から針を一本取りだし、それで卵をつく真似をした。

ははあ、卵に針で穴を開けて、中身を吸い出したんだな。なるほど。卵の殻も立派な抜け殻だ。

早速男は作業に取りかかった。これまでのコレクションは全部、少女がどこからか見つけてきたものだった。しかし今回は二人

の共同作業だ。自分の働きが大事なポイントになる。セミやヤゴに負けない立派な抜け殻を完成させなければならない。だから、男は張り切っていた。

できるだけ目立たない穴にするため、細心の注意を払って男は卵のお尻に針を突き刺し、そこに唇をあてがった。少女はベッドの縁に腰掛け、じっと成り行きを見つめていた。正直なところ男は生卵があまり好きではなかったのだが、期待に満ちた少女の瞳の前に、嫌そうな表情を見せることなどできるわけがなかった。平気、平気。私に任せておきなさい、という態度を保ち続けた。

やがてぬるぬるした生臭い粘液が喉に流れ込んできた。唇に触れる殻はひんやりとし、ざらついていた。男は気分が悪くなりそうなのをこらえ、味わう暇を与えない勢いでそれを飲み込み続けた。すぼめた唇と殻の隙間から息が漏れ、奇妙な音がした。

だんだん男は、縁日で死んだひよこを飲み込んでいるような気持ちになってきた。着色され、遠くへ運ばれたあげく、一人ぼっちで死んでいったひよこを、自分は今吊っているのだ。少女に気づかれないよう、そっと花園に埋葬しているのだ。

男は目を閉じ、最後の一滴まで、すべてを吸い尽くした。少女はベッドの上で足を揺らしながら拍手をした。二人の間に、白い小さな抜け殻が一個、残された。男はそれを窓辺のコレクションに加えた。卵はすぐに他の抜け殻たちと上手く馴染んだ。少女の拍手が一段と大きくなった。

男は相変わらずホテルの玄関に立ち続けた。自転車を四十分走らせ、ロッカーで制服に着替え、回転扉の前に立った。タクシ―が着くと、お客の手から荷物を受け取り、「本日、ご宿泊でございますか？」と尋ねた。フロントまで案内している間に、もう次の新しい客が到着していた。男は一日中、ただ玄関の内と外を出たり入ったりしているだけだった。誰も男の顔など見なかったし、名前も覚えなかった。ごくたまに、「ありがとう」と声をかけてくれる客もあったが、そのたびに男は、礼を言われるような何かを自分にしたのだろうか、という気分になった。

⑤ 同僚のドアマンたちは皆、男よりずっと若かった。男より力強く、ハンサムで、制服がよく似合った。食堂やロッカーで一緒

になっても、雑談することはなかった。彼らが男に話しかけてくるのは、勤務のシフトを交代してほしい時だけだった。

新しい下宿に引越してから、一つだけ変わったことがあった。子ども連れの客が来ると、つい少女と比べてしまうのだ。この子は少女と同じ歳とくらいだろうか。いや、熊のぬいぐるみなど抱いているところを見ると、少女よりは幼稚だ。あのロビーで走っている子。あれはいけない。いくら子どもでも分別がなさすぎる。少女ならきつと、背筋をのばし、何十分でも、もちろん静かに、ソファーに座っていられるはずだ。こっちの子はどうだろう。身長も目方もほぼ同じくらいだが、顔は全く似ていない。少女の方がずっと可愛らしい……。こんな具合だ。

どうして少女が抜け殻を集めるのか、男は不思議に思わなかった。⑥ 少女にはぬいぐるみよりも抜け殻の方がよく似合っている気がした。抜け殻を求め、果樹園や用水路の水辺を探索している彼女の姿を思い浮かべるとき、男は涙ぐみそうになって、自分でも慌てることがあった。少女はたった一人で辛抱強く、草むらをかき分け、枝を揺すり、泥を掘り返す。白いソックスが汚れ、三つ編みが解けそうになる。ようやく少女は一個の抜け殻を発見する。ついさっきまで生き物だったのに、今では空っぽの器になり、見捨てられてしまった抜け殻。中には沈黙が詰まっている。少女はそれを救い出し、大事に手のひらに包み、男の元に走って届けるのだ。

三度目の時、少女はもう、ひよこトラックについて相当の知識を蓄えていたので、姿が見えるずっと前にエンジン音をキャッチし、階段を駆け下りていった。男も後を追いかけた。少女は切り株に立ち、いつそれがやって来てもいいように、体勢を整えていた。

少女は間違えていなかった。一本道のずっと向こうから、トラックはやってきた。

ほらね。やっぱりね。

少女は得意げな顔をして見せた。

うん、本当だ。

男はうなずいた。

太陽を背に、トラックの荷台は、四隅までわずかの隙間もなくひよこたちの鮮やかな羽に埋め尽くされていた。たとえあと一羽でも、余分に乗せることは無理だろうと思われた。

男の目には、いつもよりトラックのスピードが遅く、ふらついているように映った。荷台が揺れるたび、さえずりは更にトーンを上げ、波のようにながら空の高いところまで響きわたっていた。少女は切り株の上でジャンプしていた。

私たちにひよこを十分に見せてやろうとして、わざとゆっくりと走っているのだろうか。そう、男が思った時、トラックは二人の前を通り過ぎ、農道を外れ、草むらに入り込み、そのままプラタナスの木にぶつかって横転した。あっ、と声を出す暇もない間の出来事だった。

男は慌ててトラックに駆け寄った。運転手は自力で外に這い出してきた。額から血が出ていたが意識ははっきりしていた。

「大丈夫か。しつかりしろよ。大家さん、大家さん。すぐに救急車を呼んで」

男は大声で家の中の未亡人に呼びかけた。それから運転手の首に巻かれたタオルで傷口を押さえ、もう片方の手で身体をさすった。

ふと、男が視線をあげると、そこはひよこたちで一杯だった。視界のすべてをひよこが埋め尽くしていた。突然荷台から放り出された彼らは、興奮し、混乱し、やけを起こしていた。ある群れは意味もなくその場で渦巻きを作り、ある群れは空に逃げようというのか、未熟な羽をばたつかせ、またある群れは身体を寄せ合い、打ち震えていた。

その風景の中に、少女がいた。

「駄目よ。そっちへ行つては。車が来たらはねられてしまう。そう、皆、この木陰に集まって。怖がらなくてもいいのよ。大丈夫。すぐに助けが来るわ。何の心配もいらぬの」

少女は彼らを誘導し、元気づけ、恐怖に立ちすくんでいるひよこを、胸に抱いて温めた。色とりどりの羽が舞い上がり、少女を包んでいた。

これが彼女からの本当のプレゼントだと、その時男は分かった。少女が聞かせてくれた声。⑦ これこそが、自分だけに与えられたかけがえのない贈り物だ、と。

男は何度も繰り返し少女の声を耳によみがえらせた。それはひよこたちのかき消されることがなく、いつまでも男の胸の中に響いていた。

問一 線部 a 「手持ち無沙汰」、 b 「丹精を込めた」 の言葉の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | |
|------------|--------------|
| a 「手持ち無沙汰」 | |
| ア | することがなく退屈なこと |
| イ | 手に何も持っていないこと |
| ウ | 何も考えずにいること |
| エ | 意思疎通ができないこと |
| オ | 色々と忙しくしていること |
| b 「丹精を込めた」 | |
| ア | 拍車をかけた |
| イ | 小さくした |
| ウ | 真心を尽くした |
| エ | 工夫を凝らした |
| オ | 創造した |

問二 ―― 線部① 「抜け殻」とありますが、「抜け殻」にまつわる「男」の思いとして適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア しゃべらない少女との交流のためには都合のいいものと感じている。

イ セミやカタツムリやミノムシやシマヘビ等、抜け殻の数に驚いている。

ウ 少女がたくさんの抜け殻を集めてくるので、迷惑に感じている。

エ 少女が抜け殻について感じていることは全く違う感じ方をしている。

オ 抜け殻は「捨てられたもの」で、プレゼントにはならないと思っている。

カ 自然の作り出す抜け殻の正確な作りに驚きを隠しきれないでいる。

問三 ―― 線部② 「精一杯爪先立ちをした」とありますが、それはなぜだと考えられますか。説明しなさい。

問四 —— 線部③ 「ひよこよね。ああ、そうだ、ひよこだ」とありますが、「ひよこ」について、「少女」と「男」はそれぞれ

どのように捉えていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「少女」はひよこを可愛い存在だと捉えているが、「男」はひよこをつまらない存在だと捉えている。

イ 「少女」はひよこをくだらない存在だと捉えているが、「男」はひよこを淋さびしい存在だと捉えている。

ウ 「少女」はひよこを騒がしい存在だと捉えているが、「男」はひよこを魅惑される存在だと捉えている。

エ 「少女」はひよこを元気で楽しい存在だと捉え、「男」はひよこを愛らしい存在だと捉えている。

オ 「少女」はひよこを心躍らせる存在だと捉えたが、「男」はひよこを哀れな存在だと捉えている。

問五 —— 線部④ 「少女の黒い瞳の中では、ひよこはどこへでも行けるのだ」とはどういうことですか。その説明として最も適

当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ひよこはトラックから逃げ出して、自由に飛び立てるということ。

イ ひよこは抜け殻と同じように少女に大切にされるのだということ。

ウ 少女があまりにも無知で、ひよこについて何も知らないということ。

エ 少女がひよこの未来を自分の好きなように想像できるのだということ。

オ ひよこがこれからどこに行くのかは誰にも分からないのだということ。

問六 —— 線部⑤ 「同僚のドアマンたちは皆、男よりずっと若かった。男より力強く、ハンサムで、制服がよく似合った。食堂

やロッカーで一緒になっても、雑談することはなかった。彼らが男に話しかけてくるのは、勤務のシフトを交代してほしい時
だけだった」とありますが、このときの「男」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他の若い同僚たちから半ば孤立した状態を受けいれている。

イ 他の若い同僚は強いから、仕事をたくさん頼めると思っている。

ウ 他の若い同僚から都合よく扱われ、腹立たしく感じている。

エ 他の若い同僚とは話が合わないと思い、苛々いらいらしている。

オ 他の同僚は若くてハンサムなので、卑屈ひげんになっている。

問七 —— 線部⑥ 「少女にはぬいぐるみよりも抜け殻の方がよく似合っている気がした」とありますが、なぜ「男」はこのよう

に思ったと考えられますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 身よりのない自分の空っぽな気持ちと抜け殻を集める少女の空っぽな気持ちが重なり、両方みすばらしいと感じたから。

イ ホテルに泊まりに来るぬいぐるみを持つ子どもたちよりも、抜け殻を集める少女の方が可愛らしいと感じられたから。

ウ 何事についても辛抱強く行動できる少女の性格が、とてもしっかりしていて頼もしいと男の目に映っていたから。

エ 少女は明るく活発なので、ぬいぐるみを抱くというよりも、抜け殻を採集する方がふさわしいと感じられたから。

オ 父に捨てられ母に死なれて言葉を失った少女の心の中は、ぬいぐるみより沈黙の詰まった抜け殻に近いと感じられたから。

問八 ——線部⑦「これこそが、自分だけに与えられたかけがえのない贈り物だ」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 事故が起こって動揺していた少女の発した声を、男は男自身に向けられた感謝の言葉だと感じ、それによりこれまでの苦勞が報われたということ。

イ 言葉を交わさずに交流を続けてきた少女が初めて発した声は、少女との関係を築いてきた男だからこそ得られた特別な喜びであるということ。

ウ 誰からも相手にされず、孤独で虚無的に暮らしてきた男だが、少女の声はこの上ない救いとなり、今後の男の幸せにつながったということ。

エ 今まで何もしゃべらなかつた少女がひよこを気にして発した言葉を聞き、絶望的ともいえる事故現場の雰囲気^{きふき}が少しやわらいだということ。

オ 口をきかない少女と長らく暮らしてきた男にとって、少女の初めて発した声は、病気の治癒の兆^{きざし}しに思え、男は驚き喜んでいくということ。

【問題は次のページに続きます】

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大江匡衡おおへのまきひらの子挙周たかちか、重病を受けて、^①頼み少なう見えければ、母赤染衛門あかぞめゑもん、※住吉の神に詣でて七日籠もり、^aみて「このたび助かりがたくは、速やかにわが命に代ふべし」と言ひて、七日に満ちける日、※御幣ごへいのしでに書き付けけることには、

^b代はらんと祈る命は惜しからでさても別れんことぞかなしき

かく詠むよに、神感しんかんやありけん、挙周が病よくなりにはけり。母、帰りて^②喜びながらこの様を語るに、挙周^cいみじう嘆いて「われにれ生きたりとも、母を失ひては何のかひかあらん。かつは^③不孝の身となるべし」と思ひて、住吉に詣でて言ひけるは、「われに代はりて命終はるべきならば、速やかにもとのごとくわが命を取りて、助けさせたまへ」と泣く泣く祈りければ、神あはれみをもつて御助けやありけん、母子ともに障りなくありけり。

『古今著聞集』より

注 ※ 住吉…住吉大社

※ 御幣のしで…神への捧げ物につける布や紙のこと。

問一 ――線部①「頼み少なう見えけれ」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 挙周が重病を患ったため、母親の生活のあてがなくなりそうだという事。
- イ 挙周が重い病気にかかり、長生きできる見込みがなくなったということ。
- ウ 挙周が、父親の病気が治る見込みはほとんどないだろうと思ったということ。
- エ 父親が病気になったことで、挙周の出世の可能性が少なくなったということ。
- オ 挙周が病気で死んでしまえば、母親の生きる気力がなくなってしまうということ。

問二 〜〜〜〜線部 a 「みて」、b 「代はらん」、c 「いみじう」をそれぞれ現代仮名遣いに直し、**すべてひらがな**で答えなさい。

問三 ――線部②「喜びながら」とありますが、母親はなぜ喜んでいるのですか。十五字以内で説明しなさい。

問四 ———線部③「不孝の身となるべし」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 母親が自分の身代わりになって死んだから、自分は長生きをして親不孝の罰を受けるべきだということ。
- イ 母親を犠牲にすることで命が助かったという親不孝の罰として、自分は長生きできないだろうということ。
- ウ 自分が長生きするためには、母親の命を神に差し出して世間の人から親不孝者と言われてもよいということ。
- エ 母親を身代わりにしてまで長生きすることを選ばなら、自分は親不孝者になってしまうだろうということ。
- オ 自分が母親より先に死ぬことによって母親を悲しませることは、親不孝になるに違いないということ。

問五 次の会話文は本文を読んで生徒たちが話し合ったものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

Aさん …… いい話だったね。赤染衛門が和歌で神様に祈る場面は特に感動したな。

Bさん …… 文中に I (二字) とあるから、神様もAさんと同じように感じたんだろうね。

Cさん …… II (四字) も I と同じ意味で使われているよね。神様は赤染衛門だけでなく、挙週の思いにも感動して いんげん だ。

Bさん …… 神様は、赤染衛門と挙週のどんな様子に感動したんだろう。

Aさん …… 赤染衛門と挙週の願いは同じだよ。二人の III 気持ちに感動したのではないかな。

Cさん …… 二人の願いが神に通じてよかったよね。

(1) 会話文中の

I

 ・

II

 に入る言葉を指示された字数で本文中から抜き出して答えなさい。

(2) 会話文中の

III

 にはどのような内容が入りますか。考えて答えなさい。

【一】

問一	a
	b
	c
	d
	e

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

A
B
C

問九

問十

問十一

【二】

問一	a
	b
	問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

【三】

問一

問二

a
b
c

問三

問四

問五(1)

I	
II	

(2)

【一】

問一

a 次第	b はば	c 把握	d 範囲	e 慎重
------	------	------	------	------

問二

ウ

問三

十
五
メ
丨
ト
ル
ほ
ど
の
穩
や
か
な
坂
道

問四

目	に	飛
れ	て	、
い	る	か
を	を	を
想	想	像
分	が	す
込	ど	る
ん	ん	余
く	な	裕
る	地	が
様	形	な
々	の	い
な	ど	か
情	の	ら
報	辺	。
に	り	
意	を	
識	歩	
を	い	
奪	て	
わ		

問五

イ

問六

イ

問七

ア

問八

A
イ
B
ア
C
エ

問九

視
覚
的
な
刺
激

問十

ウ

問十一

オ

【二】

問一

a
ア
b
ウ
問二
ア
カ

問三

ひよこを見たいと思ったから。

問四

オ

問五

エ

問六

ア

問七

オ

問八

イ

【三】

問一

イ

問二

a
いて
b
かわらん
c
いみじゅう

問三

息
子
の
病
気
が
よ
く
な
っ
た
か
ら
。

問四

エ

問五(1)

I
神
感
II
あ
は
れ
み

(2)

お互いのことを思いやる

受験番号